

里山ボランティアにかかわる生態学的ポリティクスへの抗い方

——身近な環境調査による市民デザインの可能性——

松村 正治

(恵泉女学園大学)

近年、全国的に里山を再評価する動きが広がっており、保全活動を実践するボランティア団体の数は急増している。しかし、市民による里山保全活動が盛んになるにつれて、いくつかの課題も指摘されるようになってきた。こうした背景を踏まえて本稿では、里山ボランティア活動において何が課題とされ、それをどのように解決しようとしているかを探ることにより、生態学的ポリティクスの存在を明らかにした。そして、その力に抗う方法として、今日の里山保全活動の興隆を、市民が里山との関係性を豊かにするための運動として位置づけ直す見方を提示した。さらに、ボランティアの活動意欲を生かした里山づくりの具体的な提案として、身近な環境調査を通して市民が里山をデザインするという可能性を示した。

キーワード：里山保全、環境ボランティア、順応的管理、生態学的ポリティクス、市民デザイン

1. はじめに

今日の里山^①は、量的な減少と質的な劣化が進む一方で、その高い生物多様性などから見直され、保全すべき景域として注目を集めている（守山，1988；石井ほか，1993）。保全生態学の研究によれば、里山を保全するには適当に草木を刈るなど「中程度の攪乱」が必要であると言われるが、燃料革命・肥料革命を経た今日では、里山に手を入れる経済合理的な動機が見当たらない。このため、無償で活動するボランティアが里山の管理主体として期待され、それに呼応するように市民による保全活動が全国的に展開されてきた（重松，1991；中川，1996）。

1990年代後半からの活動の拡がりは飛躍的で、林野庁が2004年4月に発表した統計資料によれば、「森林づくり活動」^②を実施しているボランティア団体の数は、1997年に277であったものが2000年に581、03年は1165と、3年ごとにほぼ倍増している（林野庁，2004）。また、こうした活動を支援する行政の動きも活発で、たとえば、横浜市は02年10月に「森づくりボランティア団体育成・支援要綱」を制定し、千葉県は03年3月に「千葉県里山の保全、整備及び活用の促進に関する条例」を制定し、林野庁も03年8月に森林ボランティア支援室を開設するなど、各種施策が充実してきている。

ところが、市民による里山保全活動が盛んになるにつれて、いくつかの課題も指摘されるようになってきた。もちろん、そうした課題は無地のキャンバスに自明なかたちで現れるのではなく、政治的な力が働く場において選択されるものである。そこで本稿では、里山ボランティア活動が拡大を続けるなかで、そうしたボランタリー（自発的）な行為がどのような観点から評価され、方向づけられようとしているのかを明らかにし、生態学的ポリティクスと呼べる作用を把握する。

松村：里山ボランティアにかかわる生態学的ポリティクスへの抗い方

そして、そうした力とは異なる方向を指し示すために、里山ボランティアの活動実態を見つめることで、里山との関係性を私たちがデザインしていく可能性について検討する。

2. 里山ボランティア活動の今日的課題

2.1. 行政の研修内容から抽出される課題

まずは、行政が里山ボランティア活動を積極的に支援してきた横浜市を例にとり、今日における課題として何が挙げられているのかを明らかにしよう⁽³⁾。

横浜市は、里山ボランティア⁽⁴⁾による保全活動をすすめる目的で、1994年度に「よこはまの森育成事業」を開始した。この事業は、その後「市民による里山育成事業」と名称を変更しながらも、「人の手を必要としている樹林地」と「保全活動に関わりたい市民」をつなぐために継続しておこなわれている。

2002年度までの事業では、新たなボランティア団体の組織化や、里山の保全・管理に必要な知識や技術を学ぶ連続講座を開催してきた。しかし2003年度からは、市内に里山ボランティア団体が十分に増えたので、新しい団体を立ち上げるのではなく、既存団体が抱える課題の解決に照準を定めて研修事業をおこなっている。これにともない、それまでは未経験者を対象に事業をおこなっていたが、現在の研修では、活動経験のあるボランティアに受講資格を限定している。2003年度に「里山の人材育成研修」として始まったこの研修は、2004年度には「里山のスキルアップ研修」という名称で、内容も拡充して実施された。研修のプログラムは、現場からの声に耳を傾け、ボランティアにとって必要と思われる講義・実習から組み立てられたという。したがって、この新しい研修の内容から、里山ボランティア活動における今日的課題を——行政側がどのように課題と認識しているかを——読み取ることができる。

2004年度の「里山のスキルアップ」研修では、「森を読む」「森の保全計画づくり」「安全に作業をすすめる技術」「組織運営とリーダーシップ」「森の恵みの活用」と、5つのコースが設けられた。その後、予算規模を縮小しつつも継続され、2007年度は「森を読む」と「森のリスクマネジメント」の2コースが用意されている。こうした研修を開催する目的は、「計画的な森づくり活動を支援する」ことにあり、横浜市はそれを「森づくりのPLAN・DO・SEE」と呼んで推進している。これは、「森の現状を知るための調査」→「保全計画づくり」→「安全に作業」→「作業効果の検証」という一連の流れを意味し、これらの技術を習得することがめざされている。逆に、この研修の目的から、実際の里山ボランティア活動においては、目標と計画が明確ではなく、作業の安全性は確保されておらず、さらに作業後の成果について十分に検証されていない、という行政側の見方がうかがえる。

ここで、この評価の視点を分解すると、2つの成分が認められる。1つは、里山ボランティア活動のなかにフィールドの生態系を保全できるような仕組みが備わっているのか、もう1つは、保全作業にともなうリスクを最小に抑える仕組みが備わっているのか、という視点である。後者は安全管理の問題⁽⁵⁾と指摘できるので、説明を要するのは前者である。これは、近年の保全生態学のキーワードとなっている「生態系管理における順応的管理」の問題である。

生態系管理 (ecosystem management) とは、ただ生態系を対象とした管理を意味するのではなく、「地域の生態系の望ましい特性、すなわち生物多様性や生産性の持続、あるいはそれらの回復のための活動を導く科学・技術」を表す (鷲谷, 1998 : 148)。そして生態系管理においては、生態系が複雑で不確実性が高いために、そのことを前提とした順応的管理 (adaptive management) が必要とされている。生態系における順応的管理では、調査に基づいて保全計画を立て (PLAN)、作業を実施し (DO)、その結果を見て (SEE) 計画を再考するといった仕組みを備えなければならない。これは、仮説を立て、実験し、検証するという仮説検証のプロセスを踏まえており、このフィードバック・ループを繰り返すことで望ましい生態系を実現しようとする。横浜市がすすめる「森づくりの PLAN・DO・SEE」とは、このような順応的管理を里山ボランティアに定着させようとするものと解釈できる。したがって、里山ボランティア活動の今日的な課題としては、順応的管理と安全管理を抽出できる。

2.2. NPO の活動内容から抽出される課題

横浜市の研修内容から抽出した 2 つの課題について、一般性があるのかを確認するために、国内の森づくりにかかわる代表的な NPO として特定非営利活動法人森づくりフォーラム (以下、森づくりフォーラム)⁽⁶⁾ が取り組んでいる活動内容からも、何が課題とされているのかを明らかにしたい。

現在、森づくりフォーラムが取り組んでいる調査研究活動の 2 本柱は、「森づくり安全技術・技能習得制度」と「森林施業ガイドライン」の構築である。前者は、安全に配慮した知識や技術を段階的・体系的に習得できるようにと 2002 年 6 月から検討を開始し、07 年 3 月にはマニュアル案が完成した。後者は、具体的な目標と計画の立案を通して、豊かな森づくりをめざすために 03 年 6 月から検討を始め、06 年 3 月に成果物としてガイドラインを発行した (木俣ほか編, 2006)。そのなかの「ガイドラインが提案する森づくりのプロセス」という図では、「森を知る」→「計画する」→「作業する」→「見直す」という流れが示され、さらに、「見直す」→「計画する」とフィードバックする矢印が「目標実現まで繰り返す」という言葉とともに引かれている。このプロセスは、生態系管理のための順応的管理と符合するものである。つまり、森づくりフォーラムの調査研究活動からも、順応的管理と安全管理が課題となっていることがわかる。

以上により、里山ボランティア活動をすすめている代表的な行政も NPO も、今日的な課題として順応的管理と安全管理を把握し、これを解決するために取り組んでいることが確認された。これら 2 つの課題のうち、以下では人間と環境との関係性に注目し、順応的管理にかかわる課題に焦点を絞って議論を進めてゆく。

3. 里山ボランティアの失敗が招くもの

3.1. 順応的管理の失敗例

市民による里山保全活動では、具体的に計画を立てることなく、間伐や下刈りなどの作業がおこなわれていることが多いようである。まして、作業の結果を調査し、自己評価しているところ

松村：里山ボランティアにかかわる生態学的ポリティクスへの抗い方

は、きわめて少ないだろう。しかし、作業の成果を検証できないと、ときに里山生態系にとっては悲劇を招くことがある。その一例を、東京都立桜ヶ丘公園に見ることができる。

東京都多摩市に位置する都立桜ヶ丘公園は、保全生態学者の倉本宣が里山ボランティアのコーディネーターを務めていた場所として知られている。倉本は、「やって、みて、考える」という言葉で、保全活動を試し（やって）、その成果を調査し（みて）、分析した結果から管理計画を検討する（考える）という順応的管理の手法を紹介し、実践していた（倉本・内城，1997）。しかし、倉本がコーディネーターを退くと、そのキャッチフレーズだけが残し、実態と乖離するようになった。その様子はすでに報告されているが（倉本・麻生，2001；倉本，2004）、実態を公表したボランティアのAさんから直接聞いた話をまとめると、次のとおりであった⁽⁷⁾。

Aさんは、1998年に都立桜ヶ丘公園雑木林ボランティアに入会した。ボランティアが管理する「こならの丘」（約1ha）で高木を伐採してから約5年が経過していた。Aさんがはじめて「こならの丘」に入ったとき、アズマネザサが2～3mの高さになって繁茂し、その下に芽生えていたコナラの実生が枯れているのを見て驚いた。「やって、みて、考える」という言葉に惹かれて入会したものの、「言っているだけで実情は全然違う。倉本さんの言葉が、そのまま残っているだけだった」と言う。

公園の植生管理計画には、「こならの丘」の管理方法が書かれていた。それによると、伐採後5年までは毎年下刈りをおこない、以降は1～2年周期で下刈りをするという管理計画が立てられていた。しかし、ボランティアたちは、地元農家のやり方にならって、伐採後5～6年放置するように管理方針を転換した。地域に伝わる雑木林の管理方法が、その土地にもっとも適しているに違いないと考えたようである。

けれども、農家が薪炭林・農用林として利用していた頃の雑木林は、管理放棄されて数十年が経過している現在の状態と違って土壌が痩せていたはずなので、伝統的な管理方法が今日にもふさわしいとは限らない。そうしたことまでは考えずに伐採後5～6年放置した結果、アズマネザサが生い茂り、日光を遮られたコナラの実生は枯れはじめた。生物の多様性を高めるために伐採更新したのだから、所期の目的を達成するには、その時点で何らかの対策を講ずる必要があった。しかし、Aさんが入会するまで、この状態を見ても行動を起こすボランティアは現れず、伐採を待って芽を出した埋土種子は使い果たされた。

このように、都立桜ヶ丘公園雑木林ボランティアの場合、作成されていた植生管理計画とは異なる方法を試行したところ、その結果をボランティアが評価できなかったために、生態系管理のための順応的管理を実践できなかった。この結果についてAさんは、10年間の活動の末に「自然のポテンシャルは劣化した」と厳しく診断している。そして、こうなった原因を、公募で集まったボランティアの多くがレクリエーションを目的としていることに求め、「公募型では難しいように思う。順応的管理とは言いが、調査の好きな人がいないと難しい」と、理念を実現することの困難を感じている。

このAさんの分析は、里山ボランティアの活動が自己充足的（consummatory）であったことを示している。そして、それが個人的なレベルだけではなく、団体としても生態系管理の考え方が定着していなかったことを表している。都立桜ヶ丘公園は、里山ボランティアによる順応的管理の実践モデルとして期待されていたが、現実には理念どおりに進まなかったのであった。

3.2. ボランティアの失敗に対する改善策

都立桜ヶ丘公園の実態に対して A さんは、多くのボランティアが自己充足的に活動しており、目的・目標を設けないので順応的管理ができなかったと判断を下した。このようにボランティアの個人的な動機に問題の根源を見だし、これを克服すべきと考える場合、この事例をサラモン (Lester M. Salamon) の「ボランティアの失敗 (voluntary failure)」として理解することができるだろう。

サラモンは「ボランティアの失敗」として、サービスを提供する資源が不足してしまうこと (不十分性)、サービスに偏りや重複が生じること (排他主義)、資源を提供する者の意向によってサービスが影響されること (温情主義)、専門的な知識が必要なときにサービスを十分に提供できないこと (アマチュア主義) の 4 点を挙げている (Salamon, 1995 : 44-48)。もちろん、サラモンは NPO やボランティア団体などのボランティア組織を否定するために「ボランティアの失敗」を指摘したのではない。サラモンの独創性は、「市場の失敗」に対応して政府の存在根拠を示すのではなく、先にボランティア組織に存在根拠を与え、これが失敗するから政府が必要になるという見方を提供した点にあった。すると、横浜市が「スキルアップ研修」によって、生態系管理のために順応的管理を根づかせようとするのは、ボランティアな市民団体が里山生態系の保全に「失敗」するので、地方政府である横浜市が必要になったとみなすこともできる。それでは、「ボランティアの失敗」に対応するために、横浜市の研修ではどういった改善策が示されたのだろうか。

3.2.1. 竹林と人工林の場合

横浜市では、森づくり活動が実践される市内のフィールドを、雑木林、スギ・ヒノキ林 (人工林)、竹林の 3 つに区分するのが普通である⁽⁸⁾。このうち、人工林と竹林については、雑木林と違って純林なので保全の目的を明確に立てやすく、管理方法も定型化しやすい。すなわち、人工林ならばスギやヒノキを、竹林ではおもにモウソウチクを管理対象として、これを木材あるいはタケノコとして生産するまで適切に育てることが普通である。だから、手入れの基本的な考え方は、密度管理と適当な保育に集約される。最近では、景観の美しい林として保全するという考え方などもあるが、それでも密度を管理するという基本は変わらない。

具体的に、実際の竹林を例にとって説明しよう。2003 年 4~5 月におこなわれた横浜市主催「里山ボランティア講座」では、「竹林を保全する」というテーマで竹林の管理方法について実習がおこなわれた。実習地となった竹林で毎木調査を実施したところ、面積 536 m² のなかにモウソウチクが 632 本も生えていた。景観上美しいとされる竹林密度は「番傘をさして歩ける程度」と言われ、数値に直すと 100 m² あたり 50 本程度とされる。これに従うと、実習地には 268 本のモウソウチクがあればよいことになる。そこで、5 年生の竹を間伐しながら、この竹林を適正な密度にしていこうと決めたとき、親竹として残す適正本数は $268 \text{ 本} \div 5 \text{ 年} = 53 \text{ 本/年}$ と計算できる。つまり、1~5 年生の竹が等しく 53 本に保たれるようにすればよい。これが目標となるので、当年からこの竹林を管理していく場合は、適正本数よりも多い分の $632 - 268 = 364$ 本を伐採することになる。一度にすべてを伐採すると竹の勢いが弱くなるので、かりに 4 年かけて伐採するならば、毎年 91 本を伐っていくことになる。したがって、手入れをはじめてから 4 年の間は、この数に親竹として残す 53 本の更新分を加えた 144 本を伐ればよく、その後は 53 本ずつ伐ってい

松村：里山ボランティアにかかわる生態学的ポリティクスへの抗い方

けばよい。この講座では、こうした竹林の密度管理の方法が教えられた。

例として竹林の管理方法がどのように普及されているのかを示したが、人工林についても、基本的には同じように密度を管理する方法が伝えられた。密度という1つの指標ならば、竹林や人工林を調査し、評価することも容易であり、調査・計画・作業・評価という一連の管理システムも構築しやすい。

なるほど、こうした方法が里山ボランティアに浸透すれば、適当に維持管理された竹林や人工林は増えるだろう。しかし、この方法を適用するだけでは、現状の竹林や人工林を転換して広葉樹を植えたり、畑を再生させたりというように根底から見直す考え方は生まれてこない。さらに、フィールドが雑木林の場合は、手入れの方法を一般化して教えることがそもそも難しい。なぜなら、雑木林では、何を調査しどう評価するのかを決めることが困難だからである。

3.2.2. 雑木林の場合

里山が再評価されたのは、そこに生育・生息する動植物の高い多様性が大きな理由となっている。環境省が2001年10月に発表した「日本の里地里山の調査・分析について（中間報告）」でも、絶滅危惧種が集中して生息する地域の多くは、原生的な自然地域よりむしろ里山地域であり、生物多様性を保全するうえで重要な地域であることが明らかになった。そこで、里山の価値は、そこに生息する生物種がどれだけ多いのか調べればよいと考えてみる。しかしそうすると、動植物を同定できる分類学的な知識が要求されてくる。現実には、同定能力の高い市民ボランティアは少ないので、次善の策として、カタクリ、ニリンソウ、キツネノカミソリなど良好な里山生態系を表徴する種、つまり生物多様性の情報を縮減できる指標種を選び、その増減を観察して作業内容を評価するという方法が選択されやすい（倉本，2004）。

このように、活動場所が雑木林の場合は、ボランティア自身によって活動を評価する方法が確立されていない。また、かりに指標種を見ながら手入れをすすめようとしても、そのための合意形成が難しいという別の障害がある。薪炭林・農用林としての機能を失った現在の雑木林は、生物多様性の保全だけではなく、景観、レクリエーション、環境教育、バイオマス生産など、さまざまな観点から評価することができる。つまり、竹林や人工林と異なり、評価の視点が拡散しやすいのである⁽⁹⁾。実際、現場において、どのように作業を進めるのか、その方針をめぐって団体内で意見が対立することがある。

2003年7月におこなわれた横浜市主催「里山の人材育成研修」の「里山の組織マネジメントコース」では、研修の冒頭に、里山ボランティア団体でよくみられる対立を、芝居仕立てで演じてみせた。その最初の場面で取り上げられたのは、保全方針をめぐって、自然保護を優先するタイプと作業を優先するタイプとが対立する例であった⁽¹⁰⁾。こうした対立は多くの団体でみられるようで、研修に参加したボランティアの多くは、実際の現場のやり取りが芝居のなかに凝縮して再現されていたので、何度もうなずきながら見ていた。

里山ボランティアにおける自然保護派は、管理作業を進めるよりも先にしっかりと環境調査を実施して、そのうえで保全計画を立ててから活動に着手するのがよいと考える。一方、作業優先派は、じっくりと調査・観察していても作業は遅々として進まず、その間にますます雑木林は荒れていくので、まずは自分たちの体を動かして保全活動をはじめべきだと考える。どちらにも理があり、それぞれの価値観や現状認識の違いによって、結論としての当為に違いが現れている

ので、決着をつけることは難しい。

こうした現状に対して、兵庫県三田市にある県立人と自然の博物館では、市民ボランティアでは里山の生態系管理が難しいと判断し、専門家の指示に従ってボランティアが計画的に間引く「三田方式」という管理方法を提案している。これは、市民ボランティアだけで里山の植生管理を試行したところ、保護していた植物種まで伐採するケースが続出したことから、博物館の研究者から見て「伐採作業を誤りなく進め」るために考案された方法であり、不要な植物を先に指定したうえで、ボランティアがそれを伐採するというものである（服部ほか、2004）。

ここで、「ボランティアの失敗」という概念を拡張して、サラモンが政府とボランタリー組織を対比させたのと同じように、これを専門家とも対比させて用いてみよう。すると、「ボランティアの失敗」に対して政府が登場するのと同様に、市民ボランティアに欠落している部分を補完するために、専門家によって主導される里山管理がおこなわれると解釈できる。

4. 生態学的ポリティクスにおける「ボランティアの失敗」

4.1. 里山ボランティア活動の再定義

里山ボランティアが生態系管理の視点を持たず、順応的管理を実践できないことに対し、これを「ボランティアの失敗」のようにみなして、専門家が必要だとする論理がある。科学技術社会論では、これは市民側の知識の欠如モデルというフレームで語られている（藤垣、2003）。つまりここには、市民と専門家を対比させて、市民には専門知識が不足しているので、専門家から必要な知識が与えられるべきという見方がある。里山ボランティア活動の目的を生態系管理のためだけに位置づけるならば、この論理は妥当である。しかし、このような主張が誰によって語られているかを探ると、保全生態学や生態工学などの専門家や、生態学の領域に明るい人が多く、ここに里山ボランティアを一定の方向に導こうとする政治的な力を見いだすことができる。本稿では、この力を生態学的ポリティクスと呼ぶことにする。

1960年代、生態学者たちが、人間社会も生態学的な原則から逃れられないことに注意を促し、環境収容力を無視した社会のあり方に警告を発した。こうした問題提起により、それまで自然環境にかんしては自然科学に任せ、もっぱら人間社会を対象として扱ってきた社会科学は反省を迫られた（丸山、2006）。アメリカの環境社会学が、それまで支配的だった人間特例主義パラダイム（Human Exemptionalism Paradigm）に対し、新エコロジカルパラダイム（New Environmental Paradigm）を掲げて登場したのも、社会学にエコロジー＝生態学を取り入れざるをえなくなった時代の背景があるだろう。日本の環境社会学は、アメリカの環境社会学とは出自が異なるものの、人間と環境の関係性を語るときには、生態学的な望ましさや健全さを正しいものとして自明視するか、タブーとして議論を避けてきたように思われる。そのなかで生活環境主義者は、生態系保全とは異なる論理を明確に主張しているが、「自分たちの生活をキッチンとしていくことが自分たちの美しい景色というか、景観を作る」（鳥越、2002：27）と予定調和的な方向性を示すにとどまり、それ以上の考察は深められていない。人間と環境の関係性について規範的に語ろうとするときに、私たちは生態学に基礎づけられた言説に拘束されやすいのだろう。そこで、

松村：里山ボランティアにかかわる生態学的ポリティクスへの抗い方

生態系の保全を前提して考えてしまうことをあえて問題化するために、この暗黙の力を生態学的ポリティクスと名指しする。すると、このように示すことによって、この力に抗う方策を次のように展開することも可能となる。

先述したように、里山ボランティア団体では、活動方針をめぐる自然保護派と作業優先派とが衝突することがある。この事象に欠如モデルを適用すれば、作業優先派の意見が強くなるのはボランティアに生態学的知識が不足しているからであると結論するだろう。けれども、私たちと自然とのかかわりが希薄化している現在、里山に惹かれる人びとが集い、ボランティアな活動に参加していることの意味は大きいと思われる。この現実に重きを置けば、里山とのかかわり方をめぐる争われることを、どちらかが正しいものとして審判するのではなく、むしろ対立それ自身を積極的に評価することもできるはずである。なぜなら、こうした争いがあることは、その場所に複数の観点から価値が認められていることを意味しており、その価値の1つひとつを顕現させることができれば、それだけ多様な魅力をもつ里山となりうるからである。

別な言い方をすると、こうした争いは、私たちが里山とのかかわりをどのように取り結べるのか、その関係性の多様なポテンシャルを示している。したがって、里山ボランティア活動を評価する際に、活動フィールドの生物種の多様性という指標だけを用いるのではなく、その場所と取り結ぶことが可能な「人と里山との関係性の多様性」という指標を用いる立場も認められるだろう。このような見方は、里山を標高 300 m 以下の二次林というように実体的に把握し、その空間の量や質を議論するのではなく、里山を人との関係性によってとらえ、かかわり方の広さや深さを議論する視点を提供するものである。

最近、人と川、人と海とのかかわりを取り戻したいという発想から、里川、里海という言葉も使われている。里山も里川も里海も、「里」という言葉を用いることによって、私たちと山、川、海との関係性、普遍的ではない個別の場所性を示そうとしているかもしれない。そうであるならば、里山という言葉に決まった定義がないのは、里山が人との関係性によって決まるというポテンシャルの高さのためと理解することができる。さらに、里山ボランティア活動の興隆は、私たちが身近な自然とのかかわり方を描き直そうとしている運動の現れとして把握すべきなのではないだろうか。

4.2. 人と里山との関係性の多様性

一般に、ボランティア活動には善いイメージがついているためか、里山ボランティアによる生態系管理に不十分な点があったという事実は、おおよけに語られにくいことであった。実際は、生態学的ポリティクスのなかで欠如モデルが持ち込まれ、市民と専門家、市民と行政との協働が必要という認識を強める結果になっていた。しかし、このポリティクスを見きわめ、人と里山との多様な関係性を開こうとするとき、ボランティアにとって生態系管理よりも優先順位が高いことがあるのではないかという問いに導かれる。なぜなら、生態系管理が当のボランティアにとって深刻な問題であれば、解決のための努力がすでになされているはずだからである。そこで、現実を直視して、なぜ多くのボランティアが里山にかかわっているのかと、その活動動機を掘り下げてみると、別の視角が現れてくる。ここでは、里山ボランティアの実態から、人と里山との関係性における多様なポテンシャルをすくいだしてみたい。

横浜市環境創造局は、年に4~5回、市内の里山ボランティア団体が主催するイベントの情報や、市の事業紹介などから構成される「よこはまの森ニュースレター」を発行している。2001年から過去4年間分のニュースレターの誌面から、市内にある実践的な活動団体を拾い上げると18団体を数えた⁽¹¹⁾。もちろん、この数は横浜市内の里山ボランティア団体をすべて網羅しているわけではないが、活動を広く知らせるような社会的責任のある団体の数はこの程度だと考えてよいだろう。これらの団体すべてについて、設立の経緯や活動内容について説明を聞いたり、代表者たちと話し合ったりすることができた。その結果、生態系管理とは異なるところに力点を置いて活動している例を、少なくとも3つは認めることができた。すなわち、①自治管理、②活動場所の保護、③景観美の維持である。

まず、①自治管理は「港北ニュータウン緑の会」というネットワークに所属する「けやきが丘団地森林愛護会」や「鴨池公園愛護会」などに特徴的である（よこはまの森フォーラム、2001）。けやきが丘団地とは、港北ニュータウンの開発がはじまって最初に建てられた団地であり、付属する面積1~2haの保存緑地⁽¹²⁾は、「けやきが丘団地森林愛護会」という住民組織によって管理されている。団地ができた当初は、この緑地を管理組合方式で管理する予定だったが、費用がかさむと予想されたため、住民はボランティア活動によって担うことに決め、1984年に愛護会を設立した。

こうした動きの発端は、団地に隣接する鴨池公園の竹林について、住宅・都市整備公団（現・都市再生機構）が管理のわずらわしさを理由に伐採する計画を立てたことにある。これを聞いた団地の住人は、自分たちで管理するので保存するように要望し、これが認められたことから、公園緑地に残された竹林を手入れしはじめた。この動きは、「鴨池公園愛護会」の設立へとつながり、その後、自分の住む団地の保存緑地を管理する運動が広がっていった。いつしか、この運動は港北ニュータウン全体へと展開し、1992年11月には、こうした住民団体が集まって「港北ニュータウン緑の会」が発足した。このように、ニュータウンに移り住んだ新住民による里山ボランティア活動は、自らの手で共同緑地を管理しようとする自治管理への強い欲求から生じたものである。

②活動場所の保護は、「恩田の谷戸ファンクラブ」に代表的な活動動機である。この団体は、民有地の谷戸⁽¹³⁾が開発されることを危惧して1991年に設立された。その後、土地所有者と交渉して民有地の一部を利用し、谷戸で耕作する農家を応援する立場から、継続的に小川の保全や田畑の復元、雑木林の管理などを実践している。こうした活動を10年以上も続けているのは、「フィールドに貼り付いて、実践的な作業をしていけば（社会に）アピールできる」⁽¹⁴⁾と考えているからである。つまり、特定の場所にかかわり続けることが社会的な注目を喚起し、ひいては開発行為の抑止につながるという見通しから、こうした運動戦略がとられている。

③景観美の維持は、公共緑地を管理する場合、従来からある一般的な考え方である。市民の森やふれあいの樹林⁽¹⁵⁾といった緑地や公園を管理する愛護会は、まず景観的に美しい場所をすることを求められる。このために、そうした場所で活動するボランティアには、おのずと景観的に美しい場所を作りたいという動機が生じる。林床に下草が茂ったり、枯損木が目立ったり、見た目にきたない場所を見つけると、草刈りや除間伐などにより景観的にすっきりとした空間を創り出そうとすることは多い。しかし、景観美の維持を優先すると生物多様性を損なうことがあるの

松村：里山ボランティアにかかわる生態学的ポリティクスへの抗い方

で、生態学的ポリティクスとは異なる方向性を示している。実際に、作業優先派は景観美の維持をめざし、自然保護派は生態系管理を目指すことが多く、団体内で対立することがしばしば生じる。

このような団体としての管理方針のほかに、里山ボランティア一人ひとりに対して活動に参加している理由を尋ねると、保全活動を通して仲間と一緒に汗を流すこと自体が楽しみやレクリエーションの機会となっているという自己充足的な動機を挙げる人が多い。こうした気持ちから参加するボランティアが、それぞれの生活の質を高めることにつながっているならば、この実態を生態学的ポリティクスから正すのではなく、里山において社会福祉サービスが提供されているという観点で考えてもよいだろう。

このように、里山ボランティア団体といっても、共通項は里山を活動場所にしているというだけで、生態系管理とは異なるところに活動動機があることは少なくない。こうした多様な考え方が持ち込まれることによって、人と里山との関係性をめぐって対立が生じるとともに、さまざまな関係性を取り結べる可能性も開かれていくように思われる。

5. 多様な活動意欲を生かす里山づくりの提案 ——身近な環境調査による市民デザインに向けて

ここまで、今日の里山ボランティア活動には、生態系管理のための順応的管理を根づかせようとする生態学的ポリティクスが働いていることを明らかにし、この力の向きと異なる視角から、里山保全運動の拡がりや、私たちと里山との関係性を豊かにするための運動として位置づけ直した。しかし、なぜそうしたとらえ直しを試みる必要があるのだろうか。その理由は、多くのボランティアが、個人として団体として、多様な考えをもって里山で活動している現実があるなかで、市民による里山保全のあるべき姿を生態学的な観点から評価すると、見失われる部分が多いと考えたからである。

里山ボランティア活動の今日的課題として指摘されていることは、里山生態系の保全を最上位の価値とした生態学的な一面からであり、里山とのかかわりによって人びとの生活の質がどのように高まるのかという広義の福祉的な観点はほとんど無視されている。つまり、市民は里山保全のために振る舞うべきという見方で評価されるばかりで、一人ひとりが身近な里山の将来を構想しながら豊かに生きるという方向性は考慮されていない。このため、生態系管理のための順応的管理という課題は、現実には現場にまで届かずに解決されないか、届くときには欠如モデルによる見方が現場に持ち込まれ、ボランティアな活動意欲が損なわれる可能性がある。

このように、ボランティアに働く政治性を明らかにして批判することは重要な作業であり、近年のネオリベリズムを批判する研究に、そうした動向が認められる（中野，1999；渋谷，2003）。しかし、それが批判にとどまっているだけでは、ボランティアに潜在する力を働かせる方向性が見通せない。だから、ポリティクスを見きわめたいうえで、何が可能であるのかを最後に検討しておきたい。

これまでの議論を踏まえて先に結論を述べると、フィールドにかかわる人びとの活動意欲を生

かすように努めながら、現在の里山ボランティア活動を、人と里山との関係性を豊かに描き直そうとする運動として展開していくこと、これを提案したい。つまり、私たちが身近な自然とどうやって付き合っていくのか、付き合いたいのかを、実際のフィールドにおいて考え、試みていく場として里山にかかわっていく。そういう場として里山を社会のなかに定位し、多くの人びとが自分との位置関係について思いをめぐらせることをめざすのである。

そのことを、ここでは里山の市民デザインと名づけよう。デザインの語源がラテン語の *designate* (指し示す) であることから、この言葉には、里山との望ましい関係性の方向を市民が指し示していくという意味が込められている。この用語は、ただ里山の生態系管理のために実作業をおこなう市民参加との違いを明確にできるし、計画に加わる市民参画という言葉よりも、将来の里山のイメージを描くことが表現できるように思われる。

里山の市民デザインを実践する1つの方法として、次のようなやり方がある⁽¹⁶⁾。まず、ボランティアがかかわる個別のフィールドのなかで、それぞれ里山の将来をどのようにしたいのかを考える。このとき重要なのは、自分たちが作業できる力量を考慮し、地形に応じて20 m×20 m程度ごとに土地を区切り、具体的に目標をイメージして描くのである。狭い面積であっても、さまざまな資源があるかもしれないので、現況をつぶさに観察することは欠かせない。そして、各人が目標像を表現できるようになってきたら、ワークショップをおこなって、これをフィールドにかかわる人びとの間で共有化する。活動面積が広いと区画が増えるので大変だが、団体内で意見の対立があっても、区画ごとに目標を変えられるので、多様なボランティアの願いを受け入れられる可能性も高くなる。このように現場に即して、きめ細かく目標を立てることにより、人と里山との関係性を拡げることができるだろう。

里山は、そこにかかわる人びとにとって、たとえば、「作業して汗を流す場」「環境教育の場」「植物を観察する場」「クラフトの材料を集める場」「歩いて心が癒される場」「犬を散歩させる場」「果樹を取る場」「野外料理を楽しむ場」など、さまざまな場となる可能性を秘めている。里山の市民デザインでは、こうした多様な関係性を重ね合わせたり、すみ分けたりしながら、さまざまな人びとの思いを表現できるように考えていく。また、こうして区画ごとに目標を立てたときには、1つひとつの面積が広くないので、作業計画も立てられているはずである。そして、作業をおこない、目標に照らして結果を評価し、必要ならば目標を改めていく。これは順応的管理の考え方であるが、里山の生態系管理のためにおこなうのではなく、人びとの思いどおりに里山との関係性が豊かになっているかを確認するためにおこなうのである。

このような提案が、生態学的ポリティクスとは別の思想性を帯びることは承知している。しかし、今日の里山ボランティアに働いている力に抗おうとすれば、そのこと自体避けることはできない。生態系管理の担い手として里山ボランティアに期待しても、現実のボランティアの参加動機は多様であるので実態には合わない。むしろ、実際に活動しているボランティアの力が生きるように考えようとするれば、さまざまなデザインを競うことのできる場として里山を位置づけた方がよい。このように考え、生態学的ポリティクスとは意図的に異なる方向性を示したのである。だから、このことの是非は、現実の社会によって問われるべきだろう。

生態系管理をいったん括弧にくくり、人びとの思いを優先させて里山との関係性を結び直すことを提案すると、自然が破壊されると危惧されるかもしれない。しかし、市民による里山保全活

松村：里山ボランティアにかかわる生態学的ポリティクスへの抗い方

動が盛んで、全国でも2番目に団体数が多いとされる神奈川県でさえ、手入れをしている面積は1%に過ぎないと言われている（中川，2004：28）。まずは、多くの人びとが里山に一步でも足を踏み入れ、自分と里山とのかかわり方を考えることが重要ではないだろうか。

注

- (1) 「里山」を再評価する動きでは、木を1本も伐ることが許されないような原生自然に対して、適切に管理することで保全される二次的自然の象徴として「里山」を定位するという構図を示してきた。雑木林、マツ林、採草地などの二次林・草地（ヤマ）を（狭義の）「里山」とし、農地（ノラ）や集落（ムラ）を含めた領域を「里地」と呼んで区別することもあるが（武内ほか編，2001），一般にはその範囲も含めて「里山」と呼ばれることが多い。これは、「里山」という言葉が、身近な二次的自然を表象していることを示している。こうした実態を重視して、本稿では、人びとが日常的・継続的にかかわってきた集落をとりまく二次林や農地、ため池、草原などを「里山」としてとらえる。なお、環境省は「里地」と狭義の「里山」を概念上区別するが、それぞれの言葉の定義が確定していないとして、広義の「里山」に相当する言葉として「里地里山」を使用している。日本には、二次林が約800万ha、農地などが約700万haあり、国土の4割程度を占める（環境省，2001）。
- (2) この調査における「森林づくり活動」とは、「目的とする森林を造成、維持するために、植え付け、下刈り、除伐、間伐、枝打ちなどの作業を行うこと」とされている（林野庁，2004）。
- (3) 筆者は、2003年4月から05年3月まで、特定非営利活動法人よこはま里山研究所の研究員となって参与観察をおこなった。この期間、このNPOは横浜市から「市民による里山育成事業」を受託していた。なお、横浜市の里山ボランティア支援事業や、市内の里山ボランティア活動の事例をもとに議論するために、都市住民が身近な里山で活動するという形態を念頭に置いている。全国的に見て、里山ボランティア活動は都市近郊において活発に展開されていることから、この事例の代表性は高いと考えられる。
- (4) 本稿では、「里山ボランティア」を「二次的な自然を活動の場とするボランティア」とする。「森林ボランティア」と重複することは多いが、「里山ボランティア」には領域として農地・草地・湿地などで活動する場合も含まれる。
- (5) 2004年2月22日に、兵庫県加西市の山林で間伐作業をしていた市民ボランティアが倒木の下敷きになり、腹部などを強く打って死亡するという事故が起こった。この事故を契機として、里山ボランティア活動における安全管理を徹底しようとする動きが強まった。
- (6) 森づくりフォーラムは、森林ボランティア団体・森林所有者・行政関係者・企業などとネットワークを築き、「森とともに暮らす社会」の創出をめざし、森づくりにかかわる団体支援、調査研究・政策提言などをおこなっており、国内を代表する環境NPOである。
- (7) 2003年6月28日、雑木林ボランティアのAさんにインタビュー調査をおこなった。
- (8) よこはまの森フォーラム（2001）では、「よこはまの森管理マニュアル～初級編」という章で、雑木林、スギ・ヒノキ、竹林の3林相に分けて管理方法が説明されている。
- (9) もちろん、竹林や人工林であっても、さまざまな視点から評価することを妨げるものではない。むしろ、資源生産の場としての経済的な価値が低下しているので、従来とは異なる価値づけが必要とされている。たとえば、2004年に森林療法を医療行為として確立するために「森林セラピー研究会」が設立されるなど、癒しの場としての期待は近年急速に高まっている。
- (10) そのときのシナリオを一部抜粋する。マユミ：「ちょっと、草払い機止めてよ。ねえねえ、アオキさん、どうしてあの谷戸の斜面の草刈りしちゃったの？ あそこは、すごく貴重な植生があるから、専門家を呼んできちんと調査をして、貴重なものには印をつけて、それをよけながら草刈りをしなきゃなら

- ないのに、草刈機で全部刈っちゃったでしょ？」アオキ：「一回ぐらい刈ったって、植物は強いから大丈夫だよ。また、出てくるよ。それに、マユミさんのようにのんびりやっていると、いつまでたっても調査ばかりで、ちっとも作業ができないよ。」マユミ：「そうやって、大丈夫、大丈夫って言って刈っちゃうから、横浜から貴重な植物が消えていくのよ。」エノキ：「あそこも刈っちゃダメ、こっちも刈っちゃダメっていうと、あちこちが草だらけになっちゃいますよ。」アオキ：「そうそう。実際に見た目にも問題があるし。利用者からも『もっときれいにしろ』って文句が出るよ。」マユミ：「私たちは業者じゃないんだから、見た目がきれい、というのではなく、多様な植生を守らなければならないのよ。」
- (11) 50音順に示すと、次のとおりである。荒井沢市民の森愛護会、市沢・仏向の谷戸に親しむ会、大塚歳勝土遺跡公園愛護会、恩田の谷戸ファンクラブ、かなざわ森沢山の会、烏山公園愛護会、港北ニュータウン緑の会、茅ヶ崎公園自然生態園管理運営委員会、都筑中央公園里山倶楽部、天王森泉公園愛護会、新治市民の森愛護会、日本の竹ファンクラブ、東寺尾ふれあいの樹林愛護会、舞岡公園・小谷戸の里管理運営委員会（やとひと未来）、みどりの学校、宮沢の森愛護会、横浜自然観察の森友の会、楽竹会。
- (12) 港北ニュータウンでは、民有地部分の緑地を横浜市の「緑の環境をつくり育てる条例」で保存緑地として位置づけ、永続的な担保を図っている。この緑地は、土地所有者が保存、管理することになっている。
- (13) 谷戸とは、小川の源流が丘陵地を削ってできた小さな谷地形を意味する。場所によっては、谷津、谷地などとも呼ばれる。
- (14) 2000年1月7日のTさんの言葉。「恩田の谷戸ファンクラブ」は、これまでの活動が評価され、04年には「日本の里地里山30——保全活動コンテスト」（読売新聞主催・環境省共催）に選定された。
- (15) 市民の森とふれあいの樹林は、私有緑地に開発制限をかける代わりに、土地所有者に優遇措置を講じる契約を10年以上結び、散策路等を整備して一般にも開放するという横浜市独自の制度に基づいた緑地である。
- (16) 2003年6月22日、横浜市主催「里山の人材育成研修」里山の計画コースで講師をつとめた久保田繁男氏（西多摩自然フォーラム）の講義にヒントを得た。

文献

- 藤垣裕子, 2003, 『専門知と公共性——科学技術社会論の構築へ向けて』東京大学出版会.
- 服部保・南山典子・田村和也・橋本佳延・石田弘明, 2004, 「兵庫県三田市における市民による里山林管理の一手法」『ランドスケープ研究』67 (5) : 563-566.
- 石井実・植田邦彦・重松敏則, 1993, 『里山の自然をまもる』築地書館.
- 環境省, 2001, 「日本の里地里山の調査・分析について（中間報告）」(<http://www.env.go.jp/nature/satoyama/chukan.html>).
- 木俣知大・山田隆信・吉村妙子編, 2006, 『市民参加の森づくり活動における森林施業ガイドライン』森づくりフォーラム.
- 倉本宣, 2004, 「市民による里山の維持管理」『森林科学』42 : 10-17.
- 倉本宣・麻生嘉, 2001, 「里山ボランティアによる雑木林管理——桜ヶ丘公園を例に」武内和彦・鷺谷いづみ・恒川篤史編『里山の環境学』東京大学出版会, 135-149.
- 倉本宣・内城道興, 1997, 『雑木林をつくる——人の手と自然の対話・里山作業入門』百水社.
- 丸山正次, 2006, 『環境政治理論』風行社.
- 守山弘, 1988, 『自然を守るとはどういうことか』農山漁村文化協会.
- 中川重年, 1996, 『再生の雑木林から』創森社.
- , 2004, 『森づくりテキストブック——市民による里山林・人工林管理マニュアル』山と溪谷社.
- 中野敏男, 1999, 「ボランティア動員型市民社会論の陥穽」『現代思想』27 (5) : 72-93.

松村：里山ボランティアにかかわる生態学的ポリティクスへの抗い方

林野庁, 2004, 「森林づくり活動についてのアンケート集計結果 (平成 16 年 2 月調査)」 (<http://www.rinya.maff.go.jp/puresu/h16-4gatu/0414b2.pdf>).

Salamon, Lester M., 1995, *Partners in Public Service: Government-Nonprofit Relations in the Modern Welfare State*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.

渋谷望, 2003, 『魂の労働——ネオリベラリズムの権力論』青土社.

重松敏則, 1991, 『市民による里山の保全・管理』信山社.

武内和彦・鷺谷いづみ・恒川篤史編, 2001, 『里山の環境学』東京大学出版会.

鳥越皓之, 2002, 『柳田民俗学のフィロソフィー』東京大学出版会.

鷺谷いづみ, 1998, 「生態系管理における順応的管理」『保全生態学研究』3: 145-166.

よこはまの森フォーラム, 2001, 『よこはまの森繁盛記——市民による都市の森づくりマニュアル』.

(まつむら・まさはる)

**Resisting the Affect of the Politics of Ecology
on 'Satoyama' Conservation Volunteers :
An Alternative Conservation Design Proposed by Local People
through their Research on their Local Environments**

MATSUMURA Masaharu

Faculty of Human and Social Studies

Keisen University

2-10-1 Minamino, Tama, Tokyo, 206-8586 JAPAN

In recent years 'satoyama' areas, the traditional rural landscape, have been highly evaluated for their rich diversity and have been the focus of much public attention in Japan. Correspondingly, the number of volunteers willing to help to conserve them has been increasing rapidly since the late 1980s. However, as the conservation of 'satoyama' movements has come to prevail all over the country, we can recognize that some problematic aspects have emerged from the conservation movements.

The purpose of this paper is to clarify the problematic aspects of political power operating in ecological movements by investigating the process of how conservation plans are made. The politics of ecology do not always conform to what citizens wish to achieve through their voluntary activities in the conservation movements in 'satoyama' areas.

It is important to understand correctly why more and more people are willing to participate in conservation activities. Their prime interest rests upon an enrichment of the relationship between humans and nature rather than an increase of biodiversity in the 'satoyama' areas. In order to facilitate their high spirit in the voluntary activities, I would like to suggest that volunteers should be allowed to fully participate in making up a conservation plan as well as the environmental assessment of their local 'satoyama' areas.

Keywords : 'Satoyama' conservation, Volunteers for the environment, Adaptive management, Politics of ecology, Citizen's design